

触れること

学生最後の実習、私は膵臓がんの末期のAさんを受け持たせていただいた。Aさんは日に日に弱っていく自分の身体と強い癌性疼痛に苦しんでいた。受け持ち初日、患者さんのもとへ挨拶に行くとそこには痛みを苦しむAさんの姿があった。自己紹介をし、よろしくお願ひしますと言っても痛みのせいか顔をゆがめながらうなずくだけであった。受け持ち初日であり、私は情報収集をしなければならないという使命感もあり何度かAさんのもとへ訪室するが、痛みで苦しんでいるか疲れて寝ているかでコミュニケーションがとれず、他の学生が患者さんとの関わりを増やしている中、私は焦りを感じていた。家に帰ってから癌性疼痛とその治療薬、カルテから収集したAさんの痛みの変化の情報をもとに、どうしたらAさんが少しでも楽になるか考えた。Aさんの痛みには日内変動があり午後の方が痛みの程度が少ないことが分かり、次の日は午後を中心にAさんのもとへ行き、コミュニケーションを取りに行った。やはり午後には痛みが和らぐようだが疼痛が完全になくなることはなく、Aさんと話している最中にも「いてて」と顔をゆがめることがあった。私は痛みを訴える背部を触った。するとAさんは「手あったかいね、なんだか痛みが楽になった気がする」と言った。「良かったです。このままさすりましようか？」と言うと「お願ひ」と言い、しばらくさすっているとAさんは眠りについた。

私はこの時、ある出来事を思い出した。それは私が看護師を目指すようになったきっかけである。小学生だった私は初めての手術が不安で当日に泣き出してしまった。そんな時、そばで私の手を握り不安な思いを聴いてくれたのが看護師であった。その時の手の温もりと安心感が私の看護師になりたいと思った原点である。

私は学生と言う立場でAさんの訴えを看護師に伝えることはできても、痛みを取ったり病を治したりすることはできない。そんな私がAさんにできることは何か。次の日もそのまた次の日も私はAさんのもとで背中をさすりながらAさんの思い出話を聞いたり、体調がいい日には足浴をしたりテーブルの位置を変えて一緒に窓の外を眺めたりした。日に日にAさんの笑顔も増えていった。Aさんが緩和ケア病院に転院する日、Aさんは手紙を私にくれた。「あなたがいてくれて良かった。安心できる存在でいてくれてありがとう。」その言葉は今でも心に残っている。

私には病を治すことができない。でも、患者さんのそばで身体に心に寄り添い、安心してもらえる存在になることはできる。私の理想である安心できる看護師になるために、今回の体験を忘れず、一人ひとり患者さんに真剣に向き合っていきたい。